

(ずいそう)

が、「キミ、これは紙ぢやねえか」とは、とても言えたものではない。
「まったく見事なもんだなア」と、大いにほめたことだったが、そのほめことばが、友人

「きびつちよ」考

小林 繁春

(秋田高校教諭)

に対してではなく、まことにうまくニセ物をつくった現代の「技術革新」に向けられたのだとは、いかな秀才といえども、気がつかなかったらう。

若いころ、大館の方言を研究した時、語源のわからないことばに随分なやまされた経験がある。「きびつちよ」もその一つであったが、この語は、私たちの周囲にある辞書を見れば、大体解明できたものだったことを最近気がついた。うかつだったことを恥じると同時に、辞書はやはり丁寧にみるものだとつくづく考えさせられた。

拙著『大館方言考』(昭28・4)には、「きびつちよ」は次のように簡単にしか説明されていない。
「又は『きびつちよ』とも言う。急須(茶器)の事である。これは急須の訛りである『きびしよ』が、更に訛って『きびつちよ』となったもの。」

と。これでは、「きびしよ」が「きびつちよ」「きびつちよ」「きびつちよ」になったことは、一応読者に分っていたいたいても、

肝心の「急須」が「きびしよ」になった説明は、抽象的な「流り」以外でなっていない。しかも、辞書を丁寧にしらべてみると、「急須の流りである『きびしよ』も、どうも独断らしい。

『大辞苑』には「きびつちよ」という語はなく、「きびしよ」という語がでていて、「『急須』の唐音転、急須に同じ」とある。学研『新世紀大辞典』をみると、「きびしよ(急須)きゅうす、唐音急焼(キブシャオ)の転」とある。『全国方言辞典』をみると、

「きびしよ①急須、殆んど全国。きびつちよ仙台 ②酒のかんをする土瓶。和歌山 ③醤油入れに使う急須。愛媛県大三島」

とある。すると、「きびつちよ」は「きびつちよ」の促音読みであることがわかる。「きびしよ」が全国的に使われているのに対し

て、「きびつちよ」「きびつちよ」がそうでないとするならば、「きびつちよ」が「きびしよ」の訛りであるという考えは、まあ無難と言えよう。

大言海には、「きびしよ」は「急焼ノ支那福建音ナリト云フ。」と出ている。「急焼」の福建音が果してどう発音されるのか、知りたところだが、今はどうにもならない。

『中国語辞典』には、
「(急焼) chi-chao サケワカシ、酒を燗する容器。(急須) chi-shu 古時酒ヲ燗ムルニ用フル器、燗瓶類。」

とある。これをみると、中国では「急焼」「急須」の二語が使われていることがわかるが、それが古い言葉でそれが新しい言葉であるかは、私にはよくわからない。あるいは、地域的にそれぞれの使用が違うのか、さらに、文語と口語の区別によるのか、ということも実はよくわからない。

諸橋先生の『大漢和辞典』をみると、「(急須) キフス ①酒を燗する薄い鍋。須は用。急場の時に用ひるものといふ義。へ三余(急須) 呉人呼急須と酒器を為す急須、急須者、以三其心急而用之也。②茶を煎じ出す小さい土瓶。きびしよ。(急焼) ③省略。④ chi-shao、酒を燗する容器。さけわかし。急須。」

とある。これによると、「急須」は中国揚子江下流の沿岸から南の地方(古の呉)に使われた言葉のようである。

さて、ここでちょっと憶測をしてみると、